

しいむじな

2024・夏

85

特集

夏の演奏者 セミ



ヒメハルゼミ成虫

房総のフィールド・ミュージアムとは

房総を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」ととらえる、千葉県立中央博物館によるフィールド事業（野外で展開する博物館活動）の一環です。観察会を開催したり、君津市立清和小学校の校舎を利用した「教室博物館」を拠点に、地域の方々のご協力のもと、資料の収集や調査・研究等の活動を行っています。

「蝉」が夏の季語になっていることからわかるように、古くから日本人はセミの音を聞くことで夏を感じていました。この文章を書いている7月2日、中央博物館でもニイニイゼミが鳴き始めました。

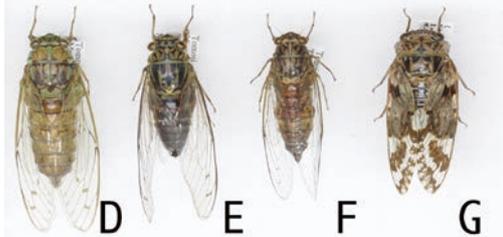
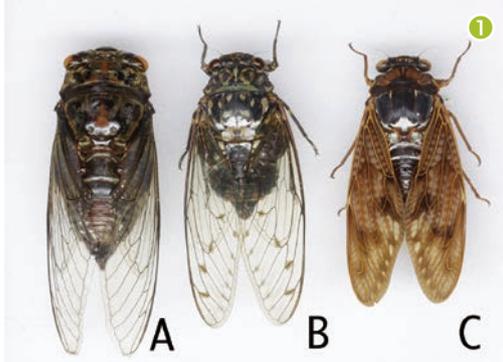
表紙の写真はヒメハルゼミ。学名を *Euterpnosia chibensis chibensis* といい、名前にかけて県南部で観察することができ、「ギョオ、ギョオ」と鳴きます。茂原市八幡神社で採集された標本をもとに名前がつけられたことから、この場所の個体群が「鶴枝ヒメハルゼミ発生地」として国の天然記念物に指定されています。

今回はセミの魅力に迫ります。

(樽宗一朗)

特集

夏の演奏者 セミ



写真① 千葉県で観察できる主なセミ
 A：クマゼミ、B：ミンミンゼミ、C：アブラゼミ、D：ヒグラシ、E：ツクツクボウシ、F：ヒメハルゼミ、G：ニイニイゼミ
 写真② セミの幼虫
 写真③ 羽化途中のアブラゼミ
 写真④ ヒメジュウシチネンゼミ（イリノイ州にて大島千幸氏撮影）

セミについて

セミは日本に35種、千葉県に9種が分布しています。写真を見てもピンとこない種類があるかもしれませんが、ミンミンゼミ（写真①B）やヒグラシ（写真①D）は、鳴き声を聞けば種類がわかる方も

いらつしやるのではないでしょう。オスのみが発音器を持つため、メスは鳴くことができません。街中でも観察できるアブラゼミ（写真①C）は茶色の翅が特徴的ですが、翅全体が着色されるセミは世界全体の中で珍しいことが知られ

ています。セミはカメムシの仲間です。他のカメムシの仲間と同じようにストロー状の口を持ち、成虫も幼虫も木の汁を吸います。抜け殻だけでも種類を判別することができ、自由研究の題材として優秀です。

セミの一生

千葉県では、成虫は6月の終わりから9月頃まで観察できます。成虫の寿命は1週間といわれることもありますが、実際はもう少し長く、2週間以上生存することもあります。

セミは一生のほとんどの時間を土の中で過ごします。成虫は交尾後、樹皮や枯れ枝に産卵します。卵から生まれた幼虫は土の中に入り、木の根から汁を吸い成長します（写真②）。幼虫の期間は種類によって異なりますが、およそ2〜5年程度と考えられています。終齢幼虫は時期になると、地上に出てきて羽化をし、成虫となります。羽化直後の体は白色で柔らかく（写真③）、時間の経過とともに着色、硬化します。

アメリカで大発生しているセミ

周期ゼミと呼ばれる、13年もしくは17年周期で成虫が現れるセミがアメリカに生息しています。周期ゼミは13年周期で発生する3種、17年周期で発生する4種の合計7種が知られており、今年はいリノイ州周辺で221年振りにこの周期が交わる年です。現地では大量のセミが発生しており（写真④）、その数は1兆匹に及ぶとも言われています。中央博物館本館では、この周期ゼミを期間限定で展示しています。ぜひお越しください。

（樽宗一朗）

コラム

房総の動植物 (5)

利根川下流域の湿原に暮らす小鳥たち

「千葉県にしかない鳥っているの？」と時々聞かれることがあります。残念ながらそのような鳥の種や亜種はまだ知られていません。ただし、「千葉県が世界最大の生息地の一つ」という鳥はいます。千葉県の北部を流れる利根川の下流域の草原は、オオセツカとコジュリンという2種の小鳥にとって、世界でも有数の生息地になっています。本稿では、利根川の下流域で繁殖する小鳥たちを紹介しましょう。

流れの緩やかな利根川の下流には、「ヨシ原」と呼ばれる丈の高い草地在が発達しています。ヨシ、マコモ、ヒメガマなどの植物から構成されるヨシ原は、多くの鳥たちの住みかとなっています。人の目には一見同じように見える草地でも、地面の乾燥の度合いによって、生えている植物の種類は様々です。ヨシ原を構成する植物によって、好む鳥の種類が異なっています。例えば、地上が水に浸かっている丈の高いヨシ原にはオオヨシキリ(写真①)、オギやセイタカアワダチソウが優占する草地にはコヨシキリ(写真②)、チガヤやスキなどの生える乾いた草地にはセツカ(写真③)が繁殖しています。オオセツカ(写真④)とコジュリン(写真⑤)は、これらの小鳥たちと同じように、ヨシ原に暮らしています。オオセツカはセンニユウ科、コジュリンはホオジロ科に属する鳥ですが、この2種の好む環境はよく似ています。ヨシ原の中でも、あまりヨシの丈が高くな

く(おおむね2m以下の中層ヨシと呼ばれる群落)、下層にスゲなどの植生が発達する草地を好み、スゲの中に巣を作ります。繁殖期には、両種ともに主に草地で昆虫やクモなどの節足動物を捕らえて食べます。

オオセツカは繁殖期になると、なわばりを張っている雄は「チュクチュクチュク……」とさえずりながら弧を描いてヨシ原の上を飛ぶディスプレイフライト(求愛飛翔)を行います(写真⑥)。尾が長くさび形で、上面には特徴的な縦斑があります。コジュリンは、「ピッピッピッ」というホオジロに似るけれどもより短いフレーズで、ヨシや灌木のつべんに止まっています(写真⑦)。雄は夏には頭部が頭巾状に黒くなり、特徴的な見た目になります。ちなみに、東庄町の鳥に指定されており、「コジュリンくん」という町公認のゆるキャラがいます。

この2種はともに世界で北東アジアの一部にしか分布しない鳥で、ロシア南東部、中国北東部、日本などに分布しています。日本国内でも生息地は非常に限られており、青森県、秋田県、茨城県、千葉県などに分布しています。このように、分布が狭く個体数が限られることから、2種ともに環境省のレッドリストで絶滅危惧種に指定されています(オオセツカは、国内希少野生動物植物種にも指定されています)。利根川下流域では、オオセツカは2003年の調査でさえずっている雄の数は600羽程度と推定され、コジュリン

は具体的な個体数の報告はないものの、数百羽が生息していると考えられています。これらの数は、それぞれ国内の1地域の繁殖個体数としては最大規模であり、利根川下流域はとても重要な繁殖地であることが分かります。

さらに、鳥類標識調査(鳥の脚に個体識別が可能な足環を付けて渡りや寿命を調べる調査)によって、青森県などの北日本で繁殖した個体が冬に渡ってきていることも明らかになっています。すなわち、利根川下流域のヨシ原は、両種の繁殖地であると同時に、越冬地でもあるのです。

残念ながら、オオセツカとコジュリンの個体数は、利根川の下流域においても減少傾向にあると考えられています。彼らに好

まれる湿ったまばらなヨシ原の環境が維持されるには、洪水や野火などの一定の攪乱が必要です。攪乱が起これば長期間経つと、ヨシ原はヤナギ類の林や、セイタカアワダチソウなどの外来植物が中心の乾燥した草原に置き換わってしまします。これら2種の生息地を保全するため、国土交通省の利根川下流河川事務所によって、河川敷の草地の野焼きが令和4年度より行われています。その結果、東庄町のヨシ原ではこの2種の密度が以前よりも高まっているように、効果的な保全のための対策となることが期待されています。多様な草地の小鳥たちが、いつまでも見られるような環境を残していきたいものですね。

(小田谷嘉弥)



写真① オオヨシキリ(スズメ目ヨシキリ科)。「ギョシギョシ……」とさえずる。
 写真② コヨシキリ(スズメ目ヨシキリ科)。他の鳥の声の鳴きまねを混ぜながら、複雑な声でさえずる。
 写真③ セツカ(スズメ目セツカ科)。「ヒッヒッ……チャチャ……」と飛びながらさえずる。
 写真④ オオセツカ(スズメ目センニユウ科)。
 写真⑤ コジュリン(スズメ目ホオジロ科)。
 写真⑥ ディスプレイフライトを行うオオセツカの雄。
 写真⑦ さえずるコジュリンの雄。

観察会報告 春の里の生きもの

4月28日(日)、君津市の三舟の里で観察会「春の里の生きもの」を開催しました(参加人数26人)。三舟の里のなかをのんびりと歩いて、植物や昆虫を中心に観察しました(写真①)。このほかにはウグイスやカエルが鳴いていました。

観察会の途中に一番盛り上がったことが、スズメノテッポウを使った草笛づくり。作ったことがある方もいれば、初めて作る方もいらっしやいました。私は経験がなく、音が出るまで苦労しましたが、最後には綺麗な音が鳴りました。最後に笹舟を流して観察会を終えました。

(樽宗一朗)



写真① 観察会の様子

連載

小櫃川流域の生きもの

ハラビロトンボ

～鮮やかな黄色のメスと藍色のオス～

ホオノキの真っ白な花が咲き、ホトトギスが遠くで「オ、キョキョキョ」と鳴いていた。ここ数年、パソコンに向かいきりであったが、久しぶりで初夏の房総丘陵に散策に行った。しかし、田畑がイノシシ避けの柵で囲まれ、自然の姿は大きく変わっていた。

休耕間もない棚田で、水草の生えた浅く澄んだ水たまりに、波紋が広がっていた。「何かいるの?」と目を凝らすと小さなトンボが腹の先を水面に突き刺していた。幅の広い腹、黄色の地に黒い筋、「ハラビロトンボのメス!」と嬉しくなった。若いころ、珍しいトンボと先輩から教わっていた。このメスはヘリコプターのように1点にとどまり、腹先をすんと水面に何度も何度も刺し入れ、懸命に産卵していた。ヨシの枯れ茎の上に真っ黒なオス、少し離れた草の下の方にはオスとメスが交尾して止まっていた。

このトンボは、流域では4月下旬~7月下旬にかけて、台地や丘陵地の比較的新しい休耕田の湿地でたまに見られるだけである。それ

MEMO

ハラビロトンボ

腹長: 20~25mm。腹部が極めて幅広く短い。平地、丘陵地の湿地、水田、暖流などに生息する。北海道南西部、本州、四国、九州などに生息。県内では、ほぼ全県で記録されている。幼虫は水深の極めて浅い湿地を好む。そのため、産地は数年で遷移して陸化してしまうところも多く、安定した産地はほとんどない。千葉県選定重要保護生物。

も、毎年、継続的に見たことはなかった。稲作を止めた直後の休耕田の浅い水たまりに発生し、その周辺で生活し、一生を終える。休耕田が乾燥し草地になると発生しなくなると考えていた。しかし、河口のヨシ原で黄色のハラビロトンボを一回だけ見つけた。色彩からメスだと思ったが、観察時期が4月下旬で、淡い色なので若い個体では?と思った。念のために腹先をみたら、交尾の時にメスの首根っこをつかまえるためのオスの付属器があった。このトンボはシオカラトンボと同じで、オスも若い頃は黄色で、成熟すると黒化することを思い出した。また、発見場所が、普段、観察される台地や丘陵地から離れているので、若いオスは広い範囲を移動するのか?と思った。いずれにせよ、台地や丘陵地の澄んだ水たまりに産卵する鮮やかな黄色と濃い藍色をもつ可憐なトンボが棲んでいることを忘れないでほしいと思った。

(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)

参考文献

・千葉県県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—動物編2011年改訂版



写真① ハラビロトンボの産卵
2018/5/5 木更津市
写真② ハラビロトンボのオス
2018/7/7 木更津市

しいむじなの由来



房総のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

(樽宗一朗)

本年度最初の号は、昆虫と鳥の話題をお届けしました。利根川河口のヨシ原はオオセッカやコジュリンなどの小鳥だけでなく、その他の生物にとっても同様に重要な地域です。今のような環境が未来に受け継がれていくことに期待します。今年度から房総のフィールド・ミュージアムの新メンバーとして小川宏和(日本古代史)と樽宗一朗(昆虫分類学)が加わりました。よろしくお願いたします。

編集後記